



なぜ ディケンズが大事？



小学部6年生の今年の教科書は「オリバー・ツイスト」です。物語の冒頭からオリバーは底なしに不幸。「これでもか！」というほど運命にいたづられます。単語も暗くてかわいそうなものばかり。読むたびに「先生、どうしてこんなの選んだの？」という子供たちの心の声が聞こえてきそうです。

実は、日本の入試や難関模試がディケンズやワイルドの文献を選ぶ傾向にあります。特に「オリバー・ツイスト」は、数年前の駿台模試で出題されたのですが、時代背景を知らなかったことが仇となり、全員が「英語は分かるのにほぼ全く読解できない」というパニックに陥りました。ワイルドは、以前から英語活動で読んでいたのですが、まさかディケンズでこんなに苦戦するとは、...

ワイルドも胸が痛くなる話が多いですが、ディケンズの「オリバー・ツイスト」の暗さと残酷さといったら比にならないほどです。恐らくそれは、彼らの生い立ちの違いもあるでしょう。ワイルドは晩年悲惨な人生でしたが、アイルランドの比較的裕福な家庭で育ちました。一方ディケンズは、少年時代からオリバーさながらの極貧生活を送ります。幼いころから学校にも行けず工場働き、そこから叩き上げて作家になっていきます。

「オリバー・ツイスト」が文学の中で重要視されるのは、まさにこの時代背景にあると思います。オリバーやディケンズのような少年労働の過酷さは、6年生が読んでいる本の中でも説明されています。機械を壊しただけで死刑になるほど無情な世界でしたが、その常軌を逸した労働に支えられたのが、イギリスの産業革命かもしれません。そこからイギリスは世界一の帝国へと発展します。その背景で苦しんだ少年労働者たちの存在を忘れないでね、というメッセージを「オリバー・ツイスト」は教えてくれているのかもしれない。



リスニングCDの中には、イギリスの当時の下層階級訛りの英語も出てきます。6年生の英語活動では、本当に色々なことを勉強しています！

来月はクリスマス！去年の中学部の冬休みの宿題は、ディケンズの「クリスマス・キャロル」の読解とエッセイでした。ご家庭で映画やDVDを観てみるのもいいかもしれません。

